
第 74 回数理社会学会大会 (JAMS74) 自由報告 報告概要

日時：2023 年 3 月 7 日 (火) ～3 月 8 日 (水)

会場：筑波大学

大会委員長：山本英弘 (筑波大学)

自由報告 I 第 1 部会

計量

司会 多喜弘文 (法政大学)

3 月 7 日 (火) 9:15～10:55

(1 H201 教室)

1 セクシュアル・ハラスメントにおける不快感の抑制要因

○ 太郎丸博 (京都大学)

張亮 (京都大学)

目的・方法

要因配置調査実験でセクハラの不快感に影響する要因を検討。

結果・考察

要因配置調査実験。セクハラが言語によるものであってもなくても、性別や親しさなどの効果に大差はなく、加害者の年齢が低いほど、被害者がサポートを期待できるほど、感情抑制規範が強いほど不快感が低くなることが分かった。

2 『聞き書きマップ』で記録した音声の自動認識によるテキスト化の試み

○原田 豊 (立正大学データサイエンス学部)

目的・方法

頑健性の高い汎用的な音声自動認識ツール"Whisper"によって、筆者らが先行研究で開発した『聞き書きマップ』による音声の録音から、有意味な発話情報を抽出してテキスト化する可能性について検討を行う。

結果・考察

Whisper を用いた音声自動認識により、『聞き書きマップ』で記録した音声情報を自動的にテキスト化できる可能性が開け、今後文字列による検索や多様な計量テキスト分析を行うことも可能になると考えられる。

3 あいまいに決定される夫婦の子ども数：回顧調査による家族形成期の分析（1）

保田時男（関西大学）

目的・方法

本報告では家族形成期の回顧調査「家族に関する振り返り調査」を用いて、夫婦が産む子どもの人数があいまいに決定されている可能性とその意味について分析・考察する。

結果・考察

出産を「成り行きに任せていた」場合や「子どもをつくるつもりはなかった」場合が無視できないほどの割合を占め、計画的だったかどうかによってその後の負担感等も異なるなど、他の回顧項目との関連も強い。

4 貧困と恋愛：回顧調査による家族形成期の分析（2）

小林盾（成蹊大学）

目的・方法

本報告では、家族形成まえに貧困を経験したり、現在貧困を経験している人が、そうでない人とくらべて恋愛経験に違いがあるのかを検討する。そのために、家族に関する振り返り調査を用いる（有効回収票数 3327，回収率 43.7%）。

結果・考察

計量分析の結果、男性では現在の貧困経験が恋愛経験を貧しくしたが、女性では家族形成まえの 15 歳時の貧困経験が恋愛経験をむしろ豊かにした。このように、貧困から恋愛へのメカニズムは単純ではない。

自由報告 I 第 2 部会
ネットワーク
司会 石黒格 (立教大学)
3 月 7 日 (火) 9:15~10:55
(1C210 教室)

1 現代アーティストの「メール・アート実験」は何を語るか
—「グローバル・アートワールド」の形成の社会ネットワーク分析—

金光淳 (京都産業大学)

目的・方法

美術史上極めて貴重なネットワーク・データに基づき、1960~70 年代から世界的規模で発展してきた「グローバル・アートワールド」の形成過程の一側面を、一人の日本人アーティストの「エゴ・ネットワーク」の計量分析から探る。

結果・考察

強い紐帯は画期となるイベントでレバレッジを効かせるが、名簿にも掲載されていない多様なアート関係者からの弱い紐帯による返信が圧倒的に多く、NY 中心から周辺への「イノベーションの普及現象」が見られ、「グローバル・アートワールド」の形成を捉えることができた。

2 トピックス数と選択的接触の閾値がエコーチェンバーの発生に与える影響

○名倉卓弥 (筑波大学大学院理工情報生命学術院)
秋山英三 (筑波大学システム情報系)

目的・方法

本研究は「ユーザ同士の選択的接触によるコミュニケーションやフォロー構築行動によるエコーチェンバーの発生は、トピックス数が増加することによってどのような影響を受けるか」ということを検証することを目的とする。

結果・考察

SNS 上のコミュニケーションにおけるトピックス数の増加は、エコーチェンバーの発生を抑制する効果があることが示唆された。また、トピックス数が増加することで、異なる態度を持つ他者に対して寛容であるほど、かえってエコーチェンバーを促進する危険性があることが示唆された。

3 社会ネットワークの形成規則と中心性—概念整理と予備的考察—

鈴木努（東北学院大学）

目的・方法

社会ネットワーク分析で用いられる中心性分析を単に頂点の影響力評価ではなく、ネットワーク形成規則と関連づけた影響の評価として扱うことを提案する。そのために、社会ネットワークに対する3つの立場とネットワーク形成規則の一樣性に関する予備的考察を行う。

結果・考察

ネットワーク形成規則の一樣性を仮定する統計的ネットワーク分析においても、結果の解釈としては一樣性を想定しない解釈が可能である。より柔軟なネットワーク形成モデルを考えるうえでは積極的にネットワーク形成規則の多様性を含むモデルを考えるべきである。

自由報告Ⅱ 第3部会

階層

司会 吉田航 (国立社会保障・人口問題研究所)

3月8日(水) 09:00~10:15

(1H201 教室)

1 Multigenerational Perspective on Trends in Intergenerational Educational Mobility in Japan

○麦山亮太 (学習院大学)

石橋拳 (専修大学大学院)

目的・方法

Trends in inequality of educational opportunity by social origin have been studied by the parent's resources and their child's educational attainment. However, little is known about the trends in the influence of other familial origins, such as grandparents, on educational attainment, which may obscure the changes in the influence of parents on their offspring. We examine how the influence of the parents' and grandparents' educational background on the child's educational attainment has changed across cohorts by exploiting the three-generation data constructed from nationally representative social surveys (the NFRJ1998, NFRJ2008, and SSM2015) in Japan.

結果・考察

The results showed that the influence of parents' education on the child's educational attainment has been stable across cohorts, but that of grandparents' has increased across cohorts. In addition, the influence of parents' education has shown downward trends after controlling for the grandparents' education. The results suggest that the change in the influence of parental resources as a measure of social origin cannot be reduced to the changes in the influence of parents. We can better understand what drives the changes in inequality in educational opportunities and thus intergenerational mobility by separating parents and grandparents.

2 職業経歴を通じた職業スキルの軌跡：ジェンダー・学歴による長期的な軌跡の違いに着目して

新田真悟（東京大学大学院）

目的・方法

本稿では SSM2015 と日本版 O-NET のマッチングデータを通じて、個人の職業経歴における職業スキルの軌跡を記述し、ライフコースを通じた職業スキルの発達過程を明らかにすることにある。

結果・考察

第一に、学歴は初発の差の形成とその後の維持に、ジェンダーは職業経歴における蓄積過程に関連している。第二に、高齢期に入ると押し並べてスキル水準が減少するものの、それが既存の差をいかに埋めるのかについては、やはり学歴とジェンダーがかかわる。第三に、とくにジェンダー別の蓄積過程においてスキルの内容による傾向の違いが見て取れた。

3 接触か相続か——三世代間学歴再生産における接触仮説と耐久性資源仮説の検証——

石橋挙（専修大学大学院）

目的・方法

三世代間の階層研究で有力視されている耐久性資源仮説と接触仮説のどちらが、日本社会で妥当かを検証する。検証のために、祖父母と孫の生存期間の重複年と祖父母学歴の交互作用を推定し、死亡している祖父母効果と、生きている祖父母の効果を区別する。

結果・考察

結果として、亡くなっている高学歴祖父を持つ孫が、そうでない孫よりも高等教育に進みやすいことが明らかになった。このことは、日本社会においては、接触仮説よりも耐久性資源仮説が有効であることを示唆する。

自由報告Ⅱ 第4部会

数理

司会 関口卓也（理化学研究所）

3月8日（水）9:00～10:15

（1C210 教室）

1 間接互惠性の進化における互惠戦略とフリーライダーの安定共存

○佐々木達矢（郡山女子大学短期大学部）

内田智士（倫理研究所）

岡田勇（創価大学）

山本仁志（立正大学）

目的・方法

これまでの協力の進化に関する研究では、様々なタイプの互惠性、特に、異なるタイプの間接互惠性の総合的な理論枠組みが欠けていた。今回我々は、最近の実験研究も参考に、アップストリーム型とダウンストリーム型の間接互惠性を統合する進化ゲームモデルを開発し、レプリケータ動学を適応して進化を分析する。

結果・考察

今回の統合モデルの分析の結果、間接互惠性のみで成る手法で、互惠的協力とフリーライダーとの間に安定した共存均衡を実現できることを解析的に示す。特に、間接互惠性のモデルにおいてエラーに依存することなく、大域的に安定な共存均衡点が得られたことは、協力の進化の理論研究的に重要な成果と考える。

2 所得格差と心理的利得がプレイヤー間の社会的距離に与える影響についてのゲーム理論分析

吉岡陽祐（筑波大学人文社会科学部研究科）

目的・方法

人々の協力行動とはどのように達成されるのだろうか。本研究では、岡田（2020）のモデルにプレイヤーの所得格差を導入し、展開形での各プレイヤーの協力が実現する社会的距離の範囲を明らかにすることで所得格差と心理的利得がプレイヤー間の社会的距離に与える影響について分析した。

結果・考察

プレイヤーの信頼行動を選択する距離の上限は大小関係が心理的利得の割引因子と所得の関係から定まる。距離の上限の大小関係を特定することができれば、心理的利得、所得のどちらに手を加えれば社会全体の協力行動を促すことへの一助となると予想される。

3 大学偏差値は何を説明しているか

—エージェント・ベース・モデル (ABM) を通して—

○樊怡舟 (広島大学高等教育研究開発センター)

康凱翔 (広島大学高等教育研究開発センター)

中尾走 (広島大学高等教育研究開発センター)

目的・方法

偏差値の仕組みそのものに関して批判も後を絶たなく、特に、偏差値制度の歴史的展開と変遷をたどり、偏差値の限界と課題についてもたびたび提起されてきている。ただし「指標」としての偏差値に焦点を向けて、その仕組みとメカニズムを数理的に解明した研究は非常に少ない。そこで本研究は ABM のシミュレーションを通して、偏差値という指標の性質及び挙動のメカニズムを理解し、偏差値の使用・偏差値の批判にかかわる議論の数理的基礎づけを初歩的に確かめることを目的とする。

結果・考察

本研究は、学生の進学行動と項目反応理論に基づく試験結果をモデル化し、各大学の偏差値の挙動を ABM を通して可視化した。さらに、各大学の策略（改革）がいかに自身の偏差値にインパクトを与えられるかについてシミュレーションから確認した。